

「カワセミランド」の子どもたち

一徹国語人

「西の高野」といわれる四国第二十一番札所の太龍寺への道は、二十番の鶴林寺と同じく急峻である。十一番札所くらいまでは、バスやタクシー・自家用車などで遍路をする人たちも多勢いて、読経の声や持鈴の音がにぎやかだった。十二番札所の焼山寺からは深い山の中に入っていくので人もぐんと減り、お寺に着いても鳥の声だけでだれもいないときもある。

幽玄の世界は、静寂さの中にこそある。その静寂さの中で光と影が塩梅よく空間をつくっている。早朝に山門をくぐると、老杉木立の並ぶ奥に本坊があり、さらに鐘楼門の階段を登りつめると前方に多宝塔、右手には中興堂から大師堂、左手には本堂から求聞持堂と、その伽藍堂塔の雄大さに驚く。

この寺に来るまでに勝浦川や那賀川を渡ってきた。河畔でキジのつがいや白サギが餌をあさり、そしてトビがゆっくりと低空を舞つるのを見たりした。実にのどかであ

る。私にとってはまるでメルヘンの世界だった。

国語の読む力の中に、作品鑑賞力のことを意味する「感想をもつ力」というのがある。これに、「批評する力」も加えて鑑賞批評力という先生もいる。

私は、この「感想」のもとを構成している「想」の研究を長い間してきた。「想」が後ろに付く言葉には、「着想・発想・連想・構想・感想・空想・夢想・幻想・理想」などがある。現実社会で得た知識や体験から生まれた概念が「想」の核となっている。つまり、新たに得た知識や体験は、それ以前に自分をもつ概念をものさしとして再確認や再構成をされたりする。

私が「西の高野」と比称される太龍寺への早朝詣でのときに得た想は、「日本版メルヘンの世界」だった。こうした場所は、日本のあちこちに今もなお存在するのだろうけれど、そこに至るまでの道が歩く者の想を少しずつ少しずつ幻想の世界へと誘い込んでいく所は、きつと少ないだろう。

ところで、私の日常生活には静寂があまりない。鳥の声を耳にする機会は少なく、つがいのキジを草むらに見ることはほとんどない。そもそも、ビルが林立していて草むらそのものがなく、メルヘンの世界へワープしてみたくなることが多い。生活上の諸条件があつてそう簡単にはいかないけれど。

しかし、心を飛ばす方法はいろいろある。映画を観たり音楽を聴いたり、〇〇ランドや□□パークへ出かけたリ、あるいは船釣りとかサイクリングをしたりということもある。ただし、それでメルヘン世界にひたれるかどうかはわからない。

視界の半分が緑になるような世界が日常的に見られる川端には、よくカワセミが巣をつくっているらしい。私は、そういう場所を「カワセミランド」と名づけている。農作業に従事したことがない私にとっては、カワセミランドは天国に近い。つまり、メルヘンの世界なのである。そんな所にぜひ行ってみたいと常に思っただが、それはないものねだりと自分では気づいているので、同じような気分になれる本を読むことで、自分をこまかしている。

遍路の途中で急に授業がしてみたくなり、私のいう「カワセミランド」の中にある小学校を訪ねてみた。校長先

生が気さくな方で、「学期初めなので授業参観は無理だが、三年生のクラスで指導をされてもいいですよ。」とおっしゃってくれた。

三年生の教科書の扉の詩を全員で一斉音読してから第一単元の教材「きつつきの商売」を使って読点区切りの交代音読（ところによつてはリレー音読ともいう）をした。１のところを一読後に、代表者音読をして、二回読みをした。

読み終えてから、「おとや」ということばの意味がわからないという子がいたので、「どんな意味かわかる人はいませんか？」と聞いてみた。きつつきが木をつついて音を出すことは、すべての子どもが理解ができていたのだが、その音で商売をするということはわからないようだった。きつつきが木をつつくことでその音を百リルで売るという概念がつかれないのだ。

カワセミランドの子どもたちに、「きつつきメルヘン」は難しかったのかもしれない。

「きつつきの商売」は、光村図書発行『国語』三年（上）に所収。